

ショスタコーヴィチ/交響曲第 9 番変ホ長調 Op.70

ドミートリイ・ショスタコーヴィチ（1906–1975）は周知のとおり、ソ連の政治状況に翻弄された作曲家である。第二次世界大戦中、交響曲第 8 番でソ連当局の批判を受けていた彼は、続く第 9 番で大規模なスターリン賛歌を書き上げ、戦時中の批判を払拭しなければならなかった。2003年にショスタコーヴィチ・アーカイヴで発見された6分ほどの冒頭の断片は、そうした彼の意図を反映しているかにみえる。ところが、7月にはこれが破棄されてしまう。

スターリンへの壮大な賛歌を期待していたソ連当局はディヴェルティメント風の軽妙な音楽に不満で、1948年、「西欧追隨の形式主義者」としてジダーノフが容赦ない批判を浴びせた。ようやくスターリンの死後2年の時を経て、名誉を回復するが、西欧ではその間にスタジオ録音もされ、いち早く成功を収めていたのである。

フィナーレに凱進行進曲を置き、勝利をおさめた祖国を讃えた朗らかな交響曲か、それとも、おどけたパロディや幾らか陳腐なユーモアが皮肉に響き、第4楽章には重苦しい管楽器の楽想が顔をみせ、戦後になってもスターリンの圧政から逃れられない不安が巣くった交響曲か。聴き手に判断がまかされているわけだが、いずれにせよ、完成度の高い傑作といえる。

全5楽章からなり、第3楽章からフィナーレまでは続けて演奏される。第1楽章アレグロはシンプルなソナタ形式。ハイドン風の軽妙さが身上である。第2楽章モデラートーアダージョは、木管楽器の活躍する主部と弱音器をつけた弦が主体となる中間部からなる。室内楽の味わいをもつ。第3楽章プレストは躍動感のある主題を軸としたロンド。熱狂的なリズムや通俗的な雰囲気、あるいは衰弱するフレーズなど、多彩な楽想が盛り込まれている。第4楽章ラルゴはフィナーレへの導入部。葬送風の重苦しい気分が支配的。第5楽章アレグレットは自由なロンド・ソナタ形式。中間部のメロディが、あとで凱進行進曲となってよみがえる。最後はアレグロで喜びのうちに終結する。

白石美雪

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、スネアドラム、バスドラム、シンバル、タンバリン、トライアングル、弦5部（スコア上の表記）

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます